

万博開幕まで3年を切った夢洲で

文・写真 加賀まゆみ(夢洲生き物調査グループ)



写真-1 万博パビリオン建設予定地。ここは昨年のドレーン地区でコアジサシが繁殖していた。今年は飛散防止処理を施された平らな地面になっているが、雨水がたまつたところにたくさんの野鳥がくる。コアジサシの群れも水浴びをしている。(2022年7月3日)

2022年、 コアジサシが定着しない…

4月下旬、例年のとおり多数のコアジサシがやってきた。しかし今年の夢洲は、土地は完全に平坦で砂利もなく、身を隠すドレーンもない。盛んに飛び回り、時折魚をくわえて飛んでいるものもいるが、なかなか営巣活動らしき姿が見つけられない。

夢洲の工事は進み、シギ・チドリやカモ類がたくさん集まっていた池は水抜きが進み、ヨシ原は刈り取られ掘り返されている。昨年末より、そのあたりは立ち入り禁止になっている。4月初め大阪港湾局同行で、今年のコアジサシ保護エリア確認を行った際にも、工事中だからと湿地・ヨシ原の状態をみることが許されなかった。設置を許可してもらった自動撮影カメラから定期的に送られてくる動画をチェックしても、声は聞こえるがコロニーはできていない。湿地は遠く、自動カメラではとらえきれない。

噂では、夢洲の沖合につくられている新しいゴミ埋め立て地(新島)にコロニーができているという。夢

洲に行くたび、200羽位のコアジサシが来て、雨水たまりで水浴びをしているのをみかけるが、新島から出張しているのかもしれない。それはそれでよいかと思う。

そのころ人間社会では、議会で通したIRカジノ誘致について、住民投票で決めてほしい、という署名活動が佳境に入っていた。夢洲に恒久的な集客遊興施設ができるば、多かれ少なかれ野鳥の生息環境に影響が出るだろう。メンバーは各自署名活動しつつ、グループとしては、大きな転機を迎えることになった。

もつれた糸をときほぐすがごとく

市長意見では、野生生物や自然環境に配慮するとしながらも、工事はどんどん進み、少し残った自然豊かなヨシ原や湿地もつぶされていく。私たちは4月11日、住民監査請求を行った。受理されたものの、5月27日棄却の通知。夢洲を巡る問題は複雑だ。この3年余りでも、エリアによって異なる管理主体、それが幾度となく組織改変され、担当も変わる。私たちはぶれないで働く



写真-2 昨年は、2区湿地で、セイタカシギの複数つがいが繁殖。みな無事育つ様子が確認された。今年も十分期待できるが、すぐそばで埋め立て工事が進み、立ち入り禁止になっている。(2021年7月18日、セイタカシギのヒナたち)



写真-3 以前は行くたびに何種類もの猛禽類を見かけたが、草原やヨシ原が失われた今年、見かけることが非常に少なくなった。しかし今でも、チョウゲンボウやミサゴが餌をとってきて食べている風景を見かける。(2022年5月15日)

きかけてきたつもりだが、提出先の組織の変化や多方面に提出した要望、それぞれの返答や公開される行政文書や、私たち内部での検討も含め、似たような書類のやり取りが続き、それはまるでもつれた糸のような状態だった。

夢洲問題を協働で対応している「NPO地域づくり工房」の傘木さん（環境アセスメント学会理事）のアドバイスで住民監査請求をするにあたり、今までの経緯を踏まえて行政発信の矛盾を整理していく、という、垣井さんによる作業は、まさにこの「もつれた糸を解きほぐす」がごときものであった。その後も、行政側の発言の論拠と矛盾を理詰めで指摘し続けている。

2025EXPO開幕まで3年を切ったということで、マスメディアも「夢洲」に注目。加速する工事とともに、私たちの調査や主張は、テレビや新聞で取り上げられることも増えた。

また、日本自然保護協会・WWFジャパン・日本野鳥の会の3団体が東京から夢洲の生物多様性を守る活動に合流。野鳥の会大阪支部も

現地調査に頻繁に入るようになり、我々と一緒に行政各方面に保全を要望するようになった。工事の進む夢洲はすでにほとんどが土の平原に変わってしまっている。それでも、季節が来ればあちこちで草が生え、鳥の声が聞こえる。

今年もセイタカシギが…

5月、心待ちにしていたセイタカシギがやってきた。工事をしているすぐそばで交尾し抱卵している様子。その姿を野鳥の会が捉え、大阪港湾局に保護を要望。協会も連名で提出させていただいた。しかし答えは、立ち入り禁止区域に入って撮影したことで、今後の夢洲への立ち入りの許可が難しくなる、ということだった。もう立ち入らないと約束することで、6月末現在、今も夢洲へ調査に入ることはできている。だが、入れる場所は幹線道路のみ。その周りに湿地も緑地もなく、生きもの調査とは名ばかりとなった。

セイタカシギのヒナは無事に巣立つだろうか？ 見えるかどうか、わからない。それでも、私たちは「確認できなかったが、それらしき姿は

あった」「土だけの工事現場にもこんなものが来ている」という事実を集め、その結果を発信し続けるしかない、と思っている。

6月末、万博後の自然復元を目標とする私たちの活動のロードマップ骨子をまとめた。夢洲の未来の自然環境を考えいくうえで、夢洲に関わる組織・諸団体が一堂に会し協議できる場をつくることが必要である。夢洲北半分に計画されるIRがどうなるか不透明だが、確実に言えることは、人間が余計なものを作らない限り、自然は自らの力によって、生きものをいっぱい引き寄せてくるということだ。これからも私たちはその手助けを続けていこうと思っている。

詳しくは協会ホームページ「夢洲の未来の自然環境のために」をごらんください。

<http://www.nature.or.jp/action/yumeshimamirai/>

7月1日、NHK「かんさい熱視線」で夢洲周辺の自然が取り上げられ、夢洲沖合の新島でコアジサシが繁殖している様子が放映されました。